

聖書：ヨハネの黙示録 14：14～15：4

説教題：モーセの歌と子羊の歌

日時：2021年6月20日（朝拝）

12章から見て来た幻の最後の部分となります。すでに7つの封印、7つのラッパの幻を見て来ましたが、いずれも主の復活から主の再臨の日までの期間に関する幻でした。今見ている幻も同じです。今日の箇所はその最後の部分ですから、歴史の最後の日、主の再臨と最後のさばきを描くものです。

最初の14節はキリストの再臨を指すものであることはすぐお分かりになるかと思います。14節：「また私は見た。すると見よ。白い雲が起り、その雲の上に人の子のような方が座っておられた。その頭には金の冠、手には鋭い鎌があった。」金の冠は王の冠、手にある鋭い鎌は刈り取りをするための鎌です。すると御使いが神殿から出て来てこう言います。15節：「あなたの鎌を送って、刈り取ってください。刈り入れの時が来ましたから。地の穀物は実っています。」ある人はここでイエス様が御使いから指令を受けるのはおかしいのではないかと言いますが、これは福音書におけるイエス様の言葉、たとえばマタイの福音書24章36節に「ただし、その日、その時がいつなのかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。」とある言葉を思い起こさせます。イエス様の再臨は父なる神が定めた日に行われるもので、父なる神だけが知っておられます。御使いはその伝令役をここで果たしただけでしょう。その声に従って16節でイエス様が地上に鎌を投げると、地は刈り取られたと記されます。

17節以降にはもう一つの記事が続きます。こちらではもう一人の御使いが天の神殿から出て来て、彼も鋭い鎌を持っていました。そして別の御使いから「あなたの鋭い鎌を送って、地のぶどうの房を刈り集めよ」と言われ、そのことがなされます。さてここでの問題は、この2つの出来事はどういう関係にあるのかということです。別々のことを語っているのか、それとも同じことを語っているのか。

この後見ますが、2つ目の幻はさばきについて描いているもののようです。19～20節を見るとそうです。問題は一つ目もさばきについて語っているのか、それとも違うことについて語っているものなのかということ。ある人は一つ目の幻は救いへの刈り

取りを意味していると取ります。実った畑にイエス様が鎌を入れて救いの民を天へと刈り取る出来事を指す。一方、2つ目の幻はさばきのための刈り取りを指す。こちらの滅びに至る刈り取りは天使によって行われると。今日の箇所だけを読むと、この説明は受け入れやすいかもしれませんが。しかし今日の箇所は、黙示録でしばしばヨエル書が下敷きとされているように、ここもヨエル書3章13節がその背景にあると考えられます。「鎌を入れよ。刈り入れの機は熟した。来て、踏み。踏み場は満ちた。石がめはあふれている。彼らの悪がひどいから。」前後関係から分かりますが、これは主のさばきの日を描くものです。鋭い鎌を入れて刈り取るというのはさばきのイメージです。また今日の箇所は前回見た14章7節の御使いの警告、「神のさばきの時が来たからだ」を受けて記されています。またある人は一つ目はイエス様による刈り取りだから救いへの刈り取りであり、二つ目はイエス様が関わっていないから滅びへの刈り取りだと考えますが、後の19章15節ではイエス様を指して「全能者なる神の激しい憤りのぶどうの踏み場を踏まれるのは、この方である」と言われ、イエス様がぶどうを踏むさばきを行うことが述べられています。このようなことからすると、有力な解釈はこの二つはどちらもさばきを描写するものだろうということです。2つ重ねられているのはその強調のためです。まず一つ目において、ついにさばきの日が来て主によって鋭い鎌が送られるということが述べられる。そして2つ目において、そのさばきがいかに恐ろしいものかがより克明に描かれる。18節に、大声で呼びかけた御使いは「祭壇から出て来て」とあります。祭壇はこれまでも殉教した聖徒たちの祈りと関係していました。その彼らの祈りに対する応答として、この最後のさばきはなされるということです。その結果、ぶどうは刈り集められて踏み場に投げ入れられ、そこで踏まれ、その血がそこから流れ出るという恐ろしい情景が描かれます。

20節にあるいくつかの言葉に短く注目したいと思います。一つはそのさばきは「都の外」で行われることです。思い起こすのはイエス様の十字架のさばきです。私たちの代わりに呪われた者となり、都の外で神のさばきが行われました。このイエス様の身代わりによる救いを受け入れない人は自らが神の都の外に追い出され、その踏み場で踏まれるというさばきを受けるのです。都の外にもう祝福はありません。二つ目にその踏み場から流れ出た血は、「馬のくつわの高さに届くほどになり」と言われていることです。馬のくつわとは馬の口にはめられるものです。ですから流れ出た血は何と馬の口のあたりまで届くほどになる。馬が血の中を泳ぐというイメージです。そのようにあたりは恐るべき血の海と化すということです。そしてもう一つは「1600スタ

ディオンの広がった」とあることです。これは地の四方を表す4を2回かけ、それに多数を表す1000をかけたものです。つまり地の面の隅から隅までということでしょう。このさばきが及ばない地は全世界のどこにもないということです。最後にはこのような日が来る！と聖書は告げているわけです。思い描くだけでも恐ろしい、私たちの想像をはるかに超える審判の日がやがて必ず来るのです。

さて今日は15章4節までを一緒に取り上げました。15章1節に「また私は、天にもう一つの大きな驚くべきしるしを見た」と記され、ここから新しい幻がスタートします。7人の御使いを通しての「最後の7つの災害」というシリーズです。ところがその7つの災害が具体的に記されるのは次回の5節以降です。5節で天にある神殿が開かれ、6節で7人の御使いが7つの災害を携えて出て来ます。それは神の憤りが満ちている7つの金の鉢と関係することが以後述べられます。その話が始まる前に2～4節の幻が挟み込まれています。この2～4節は、新しい7つの災害シリーズに属するとは思われません。そのさばきが始まる前の状況というよりも、ここは最後のさばきがなされた後の状況を描いているもののように思われます。ですから今日これまで見て来た歴史の最後の日とつながっており、その結論部分と言えます。同じような書き方は前に8章1～5節にも出て来ました。8章1節は主の再臨の日、歴史の最後の日を描くものでした。そして2節で新しいシリーズ、7つのラッパの幻が記され始めました。ところがそれが実際に記されるのは8章6節以降で、それまでの3～5節は最後のさばきの日に関する幻でした。それとよく似ています。なぜこのような書き方をしているのかについては、次回少し触れたいと思いますが、今日はこのように新しいシリーズが次に待ち構えていることを心に留めておきたいと思えます。そのことを心に留めつつ、残りの時間は2～4節に注目したいと思います。ここは最後のさばきの日には神の民はどういう状況にあるかを示すものです。

ヨハネは2節で「ガラスの海のようなもの」を見ました。すでに4章6節に「御座の前は、水晶に似たガラスの海のようなであった」とありました。「海」は決して静止せず、変化するものの象徴で、時に荒れ狂い、人間にとって危険を意味する場所でもあります。しかし御座の前にはキラキラきらめきながら、決して波立たない「ガラスの海」がありました。「海」のイメージについてはイザヤ書57章20～21節の御言葉が参考になります。「しかし、悪しき者は荒れ狂う海のような。まことに、それは鎮まることができず、その水は海草と泥を吐き出す。悪しき者には平安がない。——私の神

はそう仰せられる。」そして黙示録をここまで読んで来て「海」で思い起こすのは何と言っても 13 章 1 節で、その海から獣が上がって来たと記されていたことです。そこは混沌とした場所であるとともに、悪の源泉というイメージを持っています。その海が神の御前ではガラスの海となっている。またそこには火が混じっていたともあります。そのようなガラスの海のほとりに「獣とその像とその名を示す数字に打ち勝った人々」、すなわちまことの神の民が立っていたと 2 節は語ります。これは何を意味しているのでしょうか。

これは神がついに獣を決定的にさばき、ご自身の民に勝利を与えられたことを象徴するものと考えられます。海は獣が出て来たところですが、火はさばきを象徴します。神はその獣が出て来た海をさばき、この力をなきものとし、波の立たないガラスの海としてご自身の民に勝利を与えてくださったということです。その勝利について導き入れられて、神の民はガラスの海のほとりに立っていた。そしてここで併せて考えに入れるべきは、旧約のイスラエルの民があのかの紅海の奇跡を通して決定的に救い出された時のことです。ご存知の通り、出エジプトの際、彼らの行く手を阻んでいた海は真っ二つに分かれてイスラエルはその間を進みました。そして彼らが渡り終わった後、その後を追ったパロの軍勢がまだ海の真ん中にいた時に、水は元に戻り、エジプト軍は壊滅的な打撃を受けました。あの時、イスラエルは海のほとりで主の救いのわざを体験しました。それと同じように神の民、教会は最終的な救いをここで経験するということです。彼らを脅かした獣はついにさばかれ、その海はもはや危険な海ではない。神が火をもって完全に支配し、静めておられる。そのほとりに神の民は立っていたのです。すなわち主の勝利にあずかったということです。

それゆえイスラエルが紅海のほとりで神を賛美したように、教会も神を賛美するというのが 3～4 節です。イスラエルがパロの手から救い出され、海のほとりで歌った歌は出エジプト記 15 章にあります。その 1～2 節：「そのとき、モーセとイスラエルの子らは、主に向かってこの歌を歌った。彼らはこう言った。「主に向かって私は歌おう。主はご威光を極みまで現され、馬と乗り手を海の中に投げ込まれた。主は私の力、また、ほめ歌。主は私の救いとなられた。この方こそ、私の神。私はこの方をほめたたえる。私の父の神。この方を私はあがめる。」 また 11 節：「主よ、神々のうちに、だれかあなたのような方がいるでしょうか。だれかあなたのように、聖であって輝き、たたえられつつ恐れられ、奇しいわざを行う方がいるでしょうか。」これがモーセの

歌の一部です。これに対して今日の箇所では「モーセの歌と子羊の歌」と言われています。これはここに二つの歌があるという意味ではありません。ここにあるのは一つの歌です。言いたいのはこのことです。モーセの時代に神がイスラエルに与えてくださったあの救いは、神が将来イエス・キリストを通してご自身の民に与える完全な救いを前もって表すものだったということです。従ってモーセの歌は、神の民が最終的な救いにあずかってささげる時の賛美を先取りするものでもあったのです。そのモーセの歌が指し示していたまことの賛美を、今や神の民は神の御座の前で、ガラの海のほとりでささげている。ですからこれは「モーセの歌」であり「子羊の歌」であると言われています。子羊の歌と言われるのは、言うまでもなく、この救いはイエス・キリストを通して与えられたものだからです。旧約時代のイスラエルが過越の子羊の犠牲を経て救われたあの出来事は、将来のまことの神の子羊イエス・キリストの十字架の犠牲を通して真に実現・成就すべきものだったということです。

獣とその像とその名を示す数字に打ち勝った人々は、ここでモーセの歌に沿って賛美します。3節：「主よ、全能者なる神よ。あなたのみわざは偉大で、驚くべきものです。諸国の民の王よ。あなたの道は正しく真実です。」 あの紅海のほとりにおける救いが偉大で驚くべきものだったように、イエス・キリストを通して神が与えてくださった勝利は、ましてや偉大で驚くべきものです。「諸国の民の王よ」と呼ばれるごとく、神こそすべての上にいます王です。「あなたの道は正しく真実」とは、神の救いは神の道徳的正しさと調和することをほめたたえるものです。神はただ悪をさばかれただけではありません。それなら、神の民も同様にさばかれるべきでした。しかし神は子羊キリストの犠牲を通して、救いの道を備えてくださいました。こうして神は正義を現し、正義を満たしながら、救ってくださいました。そして4節：「主よ、あなたを恐れず、御名をあがめない者がいるのでしょうか。あなただけが聖なる方です。すべての国々の民は来て、あなたの御前にひれ伏します。」 この背後に思うべきは獣への礼拝でしょう。世の人々は獣を拝み、その前にひれ伏しました。しかし神こそ聖なる方、他の一切と区別され、ただ一人あがめられるべき方です。その神に今やすべての者は礼拝をささげると歌われています。そして最後に「あなたの正しいさばきが明らかにされたからです」と歌われています。この時まで必ずしも神の正しいさばきは明らかにされて来ませんでした。獣のさばきにおいて、悪への究極的勝利において、神の正しいさばきが明らかにされ、それゆえに御名が賛美されています。

以上、主の再臨の日と最後のさばきについての幻を見て来ました。主が再臨される日、恐ろしいさばきのための刈り取りが行われます。一方で獣を礼拝せず、主こそを信じ、主に従った民は最終的救いにあずかります。イスラエルの民が紅海のほとりで神の救いを体験し、神を賛美したように、やがて教会が天のガラスの海のほとりで、ついに獣をさばいた主の勝利と救いにあずかり、その主に向かって心から、永遠に賛美する日が来る。その日を前に見つめて、滅びゆく獣に頭を下げ、忠誠を誓う歩みでなく、真の神こそを仰ぎ、前回の12節で見た通り、「神の戒めを守り、イエスに対する信仰を持ち続ける」忍耐の歩みへ進む者たちでありたいと思います。そしてやがて多くの聖徒たちとともにガラスの海のほとりで、モーセの歌と子羊の歌を歌い、このように私たちを救ってくださったのはただあなたの恵みによることです！と賛美し、永遠に神を礼拝し、神に栄光を帰す神の民の真の幸いな歩みへ導かれて行きたいと思いをします。